

マタイ2章1-12節「東方からの礼拝者」

1A 恐れ感うヘロデ 1-6

1B ユダヤ人の王 1-3

2B ベツレヘムからの支配者 4-6

2A この上もなく喜ぶ賢者たち 7-12

1B 隠れた動機 7-8

2B 贈り物の献上 9-12

本文

マタイによる福音書2章を開いてください。私たちは、先週から新約聖書の学びに入っています。今朝は、前半部分、1節から12節までを眺め、次週に2章の後半部分を読みます。とても有名な、イエスの誕生の話です。毎年、クリスマスになるとこの話が出て来るので、私たちはクリスマスのイメージが固定されています。けれども、今朝はなるべく、真実に迫る、歴史的背景をしっかりと踏まえたイエス様の誕生を見ていきたいと思えます。

1A 恐れ感うヘロデ 1-6

1B ユダヤ人の王 1-3

先週も話しましたが、聖書の話は信じやすいように書かれていません。聖霊によって処女が身ごもるといった話なんか、話の初めに持ってきたら人は信じないよ、と思えますね。いや、それこそが聖書の著者の意図であり、著者を動かした聖霊の意図です。私たちの生活に、理解のできないようなことが起こる、時に苦悩するし、逡巡するようなことが起こる、またはあまりにも突拍子のないことなので驚き怪しむ、そういった意外性に神がおられる場合が多いです。2章も同じです、イエスが生まれた後、この方にお会いするために、あまりにも意外な人々がやって来ました。ユダヤ人も何でもない人たちが、はるか東方からユダヤ人の王を拝みに来たことです。そして、当のユダヤ人たち、エルサレムの人たちがユダヤ人の王をあがめないことです。

けれども、それもまたありかもしれませんね。「近いとかえって感謝せず、遠いから感謝する」というのは人間の性かもしれません。私の家からは毎日、スカイツリーが見えています。けれども、一度も行ったことがありません。けれども、スカイツリーにはるばる九州や沖縄から、いや外国からやってくる人たちもいますね。遠い人がとても大事にし、近い人が近いがゆえにないがしろにします。イエス様についても、そうかもしれません。身近な存在、近くで数多く見聞きする存在だからなおがしろにするけれども、一度聞いた人、僅かに聞いた人のほうが感謝することがあるかもしれません。

1 イエスが、ヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東方の博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。2「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東のほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。」

イエスがお生まれになったのは、「ヘロデ王の時代」とあります。イエス様の誕生については、ルカによる福音書と比べると興味深いのですが、ルカは、ローマ皇帝アウグストの治世の時に、ヨセフとマリヤがベツレヘムに行ったことを書いています(2:1)。けれども、マタイは、ヘロデ王の時代であると言っています。これは、どちらも正しいです。ローマ帝国の中にユダヤ人が生きており、かつヘロデ大王の統治下にユダヤ人たちはいました。そしてユダヤ人にとっては、ヘロデ家のほうが身近な存在です。これから詳しく説明していきます。

歴史はギリシヤ時代から遡らないといけないのですが、ユダヤ人のマカバイ家がギリシヤの王に反乱を起こして、ハスモン朝が生まれました。けれども、すぐに政治抗争が起こって国としてまとまっていませんでした。けれども、その時、ハスモン朝の末期の王に仕えていた側近が、イドマヤ人のアンティパトロスという人でした。ヘロデ王の父親です。イドマヤ人とは、エドム人のことであり、かつてハスモン朝の王がエドム人をユダヤ教に強制的に改宗させました。ですから、ユダヤ人ではないのですが、ユダヤ教の改宗者でありました。アンティパトロスの話に戻りますが、そうこうしているうちに、ギリシヤの力が弱まり、ローマが台頭してきました。そこで、アンティパトロスもローマの中で強い勢力に味方していきます。息子のヘロデも同じようにローマを支援することによって、力を得ます。ローマの中で内部抗争があるけれども、彼は上手にその中を泳いでいき、ますます力を得ていきます。そしてヘロデは、エルサレムに向かい、ローマ軍の助けも得て、紀元前 37 年にエルサレムを陥落させるのです。これでハスモン朝は終わり、ユダヤ地方を自分の統治する国としてローマから株分けしてもらいました(分封王と呼ばれます)。それでヘロデが、「ユダヤ人の王」と呼ばれるようになります。

ですから、ヘロデのところに東方からの博士たちが、「ユダヤ人の王を拝みにまいりました」と言ってきた時、後で読みますが、恐れ感つたとあります。

ヘロデは、かなりすごい人物でした。すごいというのは、優れているということではなく、「天才だが横暴で、偏執的」と言えます。彼は、建築の天才です。カイザリヤの港は、初めて海中にコンクリートを流し込む技術で人工の港を造りました。マサダ要塞は、死海ほとりにそびえたつ台地の上に、ローマ風呂も完備された宮廷を造りました。またヘロデウムという住まいもそうです。そして最もすごいのが、エルサレムの神殿の大改修です。紀元前 20 年頃に工事を開始して、完成したのはなんと、紀元後の 64 年であったと言われています。それだけの年月がかかるものですが、大理石で造られた神殿は実に荘厳でした。ヘロデはユダヤ教徒であり、それでユダヤ人の歓心を買うことができていると思いましたが、彼がユダヤ人ではないこと、また彼の横暴な政治には、ユダ

ヤ人は強い不満を持っていました。けれども、みな彼を恐れて口をつぐんでいました。そして大規模な工事をしていたので、民に重税と労役を課していました。

そしてヘロデは、晩年になると偏執になっていきます。ハスモン朝の血筋を持っている者たちを、妻でも息子でも家族をみな殺しました。妻のマリアンメと二人の息子を殺害しました。別の妻の息子も殺害、マリアンメの兄弟とその母親も殺しました。また彼女の祖父も殺します。おかしなことに、ヘロデはマリアンメを自分が殺しながら、彼女の死を悲しみ、激しく号泣します。皇帝アウグストは、「ヘロデの息子になるよりは、ヘロデの豚になったほうが、まだましだ。」とまで言ったのです。後でヘロデがベツレヘムの二歳以下の子を全て虐殺しますが、そういった男でした。

そんな時代に、イエス様は「ユダヤのベツレヘム」にお生まれになります。ユダヤといっているのは、ガリラヤ地方にもベツレヘムという同名の町があるからです。これは、「パンの家」という意味です。収穫のたくさん取れるところ、ということですね。ヤコブの妻ラケルが死んだ時、ラマというところでヤコブは葬りましたが、エルサレムより少し北にあります。ラマからの道を南に下ると、ベツレヘムがありました。そして何といても、そこがあのルツ記の舞台であります。ルツが収穫の落穂拾いをしていた時、その畑の主がボアズで、ボアズとルツが結婚、そしてその孫がダビデです。それで、そこは「ダビデの町(ルカ 2:11)」と呼ばれるようになりました。

「見よ、東方の博士たちがエルサレムにやって来て」とあります。東方というのは、イスラエルからはユーフラテス川の向こう側、メソポタミヤ地方です。かつてのバビロン、ペルシヤのあったところ。そこから「博士」が来たとありますが、マジシャンの語源になっているマゴス(複数形はマゴイ)となっています。これは賢者と訳したほうがよいかもしれません。今の政府のシンクタンク、政策に提言や助言をする研究者集団のようなものです。当時は、天文学と占星術が渾然一体となっていました。ですから、星占いのようなこともしながら、国の行末も推し量っていたのです。

そういった完全に異教で、神の厳しく禁じられている占いまでしているような彼らが、「ユダヤ人の王」を拝みにやってきたというから驚きなのです。しかも、政府の役人のような人が来たのです。これには、おそらくはるか五百年前のバビロンの時代に残した、ダニエルの証しがあったからです。ダニエルは、バビロンに捕え移された捕虜の一人ですが、王に仕える役人になり、そして神がダニエルに、夢や謎を解き明かす力を与えてくださいました。そして、ネブカデネザル王は、「彼を呪法師、呪文師、カルデヤ人、星占いたちの長とされた(5:11)」ということです。そしてネブカデネザルも、ダニエルの証しする天の神を知り、この方に栄光を帰したことが書かれています。この証しが強烈に残っていて、何百年も彼らはユダヤ人の神、そしてユダヤ人の王を求めていたのでしょう。驚きですが、こうやって過去の人々が残した証しというものを、神は決して無駄にはされず、私たちの証しは、その続きとして積み上げられていっているのだと言えるのかもしれません。

けれども、どうしてまた、「東のほうでその方の星を見た」と言っているのでしょうか？ダニエルのいた紀元前 500 年頃よりも、さらに 900 年ぐらい前のことです、紀元前 1400 年辺りに同じように、東方から来た預言者バラムがいました。モアブ人の王バラクに雇われて、イスラエルを呪えと言われたのですが、神がその呪いを祝福に変えられました。そして、彼は預言したのです。「私は見る。しかし今ではない。私は見つめる。しかし間近ではない。ヤコブから一つの星が上り、イスラエルから一本の杖が起こり、モアブのこめかみと、すべての騒ぎ立つ者の脳天を打ち砕く。(民数 24:17)」ヤコブから一つの星が起こるのです。杖というのは王権のことですから、イスラエルから王が出て来るという預言なのです。こんなに途方もない長い歴史をかけて、主が全くの異邦人である彼らを、礼拝に来るところまでせしめたのであります。

思えば、日本のキリスト教会の歴史にもあります。世界の教会史において、最も大規模な迫害の一つとして記録されているのは、実は日本です。キリシタンの取り締まりを土台にして、日本の鎖国政策が始まりました。そして 250 年の禁教時代が来るのですが、なんとその信仰は受け継がれていったのです。日本人の伝道仕バスマンが預言をしたと言われていています。それは、七代まで神が子孫を残してください、そして神父が黒船で来て、自由に礼拝をすることができるようになるという預言です。そして、大浦天主堂が 1865 年に建てられます。その時に、信徒が現れてきたのです。このように、僅かな霊的知識しか与えられていなくても、長い期間であっても、それでも神はその証しを続けさせてくださるということです。

3 それを聞いて、ヘロデ王は恐れ感った。エルサレム中の人も王と同様であった。

東方の博士たちが、喜びと期待の思いをもってエルサレムに来たのに対して、当のエルサレムの住民、そしてヘロデは全く反対の反応をしました。このように、キリストが来られるということは、二つの全く正反対の反応を引き出します。意見を二分します。この方を全き心で受け入れ、信じ、従いたいという願いを持つか、あるいは明け渡せない心があれば、恐れを抱くかのどちらかです。

ヘロデについては、先ほど話したように自分がユダヤ人の王であるという正統性が否定されたのです。そもそも彼はイドマヤ人、聖書によれば、イスラエル人のユダ族でなければユダヤ人の王になることはできません。そして、星が登場したというのは、一つの天の徴と言えるでしょう。これらが恐れの原因となりました。そして、ヘロデだけでなく、エルサレムの人たちにも同様だったとあります。ヘロデをいくら嫌がっていると言っても、やはりヘロデによって自分たちの社会が安定していました。政治的に、宗教的に力を持っている人は、その地位が脅かされると感じたことでしょう。イエスが、エルサレムに向かわれた時に、大祭司カヤパが彼を殺すと決めたのは、自己保身、政治的な動機でありました(ヨハネ 11 章)。そして意外に、一般民衆も恐れていたのです。こんな時にヘロデを怒らせたなら、我々に何をしでかすか分からないという恐れがあったでしょう。

恐れとか、漠然とした不安というものが私たちの社会に通底しています。恐れは、ひとえに「プライド」から来ています。自分の生活を自分で支配しないとイケない、自分というものが壊されてはイケないというプライドです。それが脅かされる時に恐れが出てきます。しかし、礼拝とは、明け渡す行為です。自分のもの、核になるものを超越した方に差し出すことです。そうした、みなぎが恐れている中でも、それでもイエス様を愛し、従いますという人たちが永遠の命を得ます。「わたしの義人は信仰によって生きる。もし、恐れ退くなら、わたしのこころは彼を喜ばない。私たちは、恐れ退いて滅びるのではなく、信じていのちを保つ者です。(ヘブル 10:38-39)」

2B ベツレヘムからの支配者 4-6

4 そこで、王は、民の祭司長たち、学者たちをみな集めて、キリストはどこで生まれるのかと問いただした。5 彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれているからです。6 『ユダの地、ベツレヘム。あなたはユダを治める者たちの中で、決して一番小さくはない。わたしの民イスラエルを治める支配者が、あなたから出るのだから。』」

東方からの賢者たちは、ユダヤ人の王を礼拝するためエルサレムに来たのですが、ユダヤ人の王はメシヤ、キリストであることは、ヘロデ本人が良く知っていました。そして、聖書によればどこから出て来るのか分かるはずだと思い、それをユダヤ人たちの学者たちに聞いたのです。「民の祭司長」とは、歴代誌に神殿の礼拝で奉仕をする 24 の祭司の組についての務めが書かれていますが、その組の長たちのことです。そして学者は、エズラが律法の学者でありました、律法学者と呼んでいいでしょう。彼らの多くが、パリサイ派でした。祭司長たち、学者たちを集めているとなると、おそらくユダヤ人議会のサンヘドリンではないかと思われる。

彼らの答えは、「ベツレヘム」でした。それが、ミカ書 5 章 2 節に書かれていました。「ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである。」ミカの預言では、ユダの民がバビロンの捕囚の民として連れて行かれることを話した後で、それでもベツレヘムからイスラエルの支配者になる者が出てくるという預言でありました。しかも、それが、神が永遠の昔から決めておられると決めておられるところです。

次を読むと、ヘロデは反応しているのですが、祭司長や学者たちは自分たちのメシヤが来られたのだから、拝みに行こうというようにはなっていないことは不思議です。僅かな光、僅かな知識しか与えられていない東方の賢者たちが、はるばる礼拝しに来たのに、肝心の神の言葉に精通している者たちが、預言の言葉の成就に感動していないのです。彼らの問題は、「人を教えながら、自分自身を教えない」ということです(ローマ 2:21)。マラキの預言で、神が問題にしておられたことが起こっているのでしょう、神の愛が分からなくなり、心が神から離れていて、その奉仕がマンネリ化していた、中途半端になっていたということです。

2A この上もなく喜ぶ賢者たち 7-12

1B 隠れた動機 7-8

7 そこで、ヘロデはひそかに博士たちを呼んで、彼らから星の出現の時間を突き止めた。8 そして、こう言って彼らをベツレヘムに送った。「行って幼子のことを詳しく調べ、わかったら知らせてもらいたい。私も行って拝むから。」

「ひそかに博士たちを呼んで」とあります、ヘロデはちっとも、拝もうなんて考えていません。いかにその幼子を特定するか、それだけしか考えていません。東方の博士たちは、この時点でヘロデの陰謀には気づいていませんでしたが、夢で警告を受け、知らされます。このように、人は謀をしますが、神のご計画は必ず成り立ちます。「箴言 19:21 人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。」

ところでイエス様は十字架において、「ユダヤ人の王」の罪状書きで殺されます。けれども、お生まれになった間もない時から、このように殺される危険に晒されました。この幼子がただの人ではないことが確かなのです。なぜ、幼子をこうも恐れなければいけないのでしょうか？神が働かれる時に、こうなります。人は反応せざるを得ないのです。

2B 贈り物の献上 9-12

9 彼らは王の言ったことを聞いて出かけた。すると、見よ、東方で見た星が彼らを先導し、ついに幼子のおられる所まで進んで行き、その上にとどまった。

ヘロデのどろどろした陰謀から、一気に喜びの雰囲気が変わります。彼らは、ユダヤ人の王が出て来るというところまでは聞いていたのですが、そこからが分かりませんでした。ところが、その時に、「見よ、東方で見た星が彼らを先導し」たあります。なんとすばらしいことでしょうか！今、彼らが信仰によって、長い旅に踏み出したその希望の光が、再び自分たちの目の前に現れました。ところで、この星はおそらく、単なる物理的な星のことではなく、光り輝く神の栄光であったでしょう。そして私たちにとって、主は暗闇の中に輝く光であります。そして、人々を導く光であります。この方に付いて行けば、つまりくことはありません。

10 その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。

これが、救いを得た人々の心です。この方に光があると信じ、その歩みを始めるなら、必ず報いがあります。喜びがあります。「1ペテロ 1:8 あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。」主にすべてを明け渡す者、礼拝をする者の心には、畏れかしこみ、畏敬はありますが、恐れはありません。その明け渡した心に、神は救いの喜びでいっぱいにしてくだ

さるからです。

11 そしてその家にはいって、母マリヤとともにおられる幼子を見、ひれ伏して拝んだ。そして、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた。

そこは、「家」でした。ルカによる福音書ですと、家畜小屋でありましたが、既に家に移っているようです。そして、母マリヤと共にいるのは「幼子」とあります。乳飲み子であると、ルカの福音書にはありました。そして、後で二歳以下の男の子をヘロデが殺しますので、イエス様が乳児ではないことは確かです。ルカが書き記した、羊飼いがやって来たイエス様を見た時から、今は少し後の話になっています。

そして彼らの行なったことが、「ひれ伏し」です。これが礼拝です。王に対して、自分の権利、自分の栄光、自分の富、自分の知恵、そういったものを全て明け渡すことです。考えてみてください、彼らは、はるか東方であります、高い地位にいる政府の人々であります。彼らが、外国の地にいる貧しいユダヤ人家庭の幼子に対して、礼拝しているのです。

しかし、彼らの心の中には、見えている幻がありました。それは、世界中から、遠くの国々からも、エルサレム、イスラエルにおられる王を拝するのために、貢物を持ってくる姿です。「イザヤ 60:9 まことに、島々はわたしを待ち望み、タルシシュの船は真先に、あなたの子らを遠くから来させ、彼らの金銀もいっしょに、あなたの神、主の名のために、イスラエルの聖なる者のために運んでくる。主があなたを輝かされたからである。」世界中の国々から、人々が王なるキリストに捧げ物を持ってきます。ユダヤ人だけでなく、すべての国々です。私たちも、このイザヤの預言にあるように、はるか遠くの島々に住んでいる者です。しかし、ユダヤ人の王を見いだしました。それで、この方こそが救いを与えると信じて、自分たちの高価なものを差し出しました。私たちは、マラキ書で学びましたが、神に愛された者の応答は、神に捧げ物をするということです。人の心が、どこにあるのか、主ご自身にあるのかどうかは、その捧げ物に現れます。しかも、彼らは多くの犠牲を払って捧げました。犠牲のないところは礼拝はありません。

そして、その捧げ物であります、「黄金」は、王の輝かしい栄光が示されています。「乳香」は、「乳香樹という木の樹脂が固まったもの」です。「乳汁と果汁をかき混ぜたような不思議な半透明の色をしています。…加熱してみると、芳香を含んだ白煙が、ふつふつという微かな音とともにたちのぼります。」と日本人で、実際に経験した人が言っています。神への祈りにささげられる香りを表しているのでしょう。そして没薬も、ミルラと呼ばれる樹脂から取られたものです。死体の防腐剤として使われますが、なぜユダヤ人の王に対してそのような物がささげられたのでしょうか。ここに、キリストが罪のために死なれることが預言されています。この方こそ、全人類の罪の供え物となってくださった救い主であり、この方を信頼することによって罪の赦しを得ることが出来ます。本人た

ちは意識していなかった可能性のほうが大きいと思いますが、信仰によって捧げる時に、このように神の御霊によって、ぴったりと合ったものを捧げることができます。

12 それから、夢でヘロデのところへ戻るなという戒めを受けたので、別の道から自分の国へ帰って行った。

ベツレヘムから、東方の国に帰るのは必ず、エルサレムに戻って、それからアラバ、ヨルダン川のほうに下っていくのが正道です。さもなければ、ずっと南に下って、死海の南から王の道にはいって行くという、非常に遠回りになります。けれども、その別の道を取ったのです。ところで、夢によって彼らは語られています。ヨセフに主が語られ、マリヤが聖霊によって身ごもったことを告げられました。次にヨセフも主の使いによってエジプトに逃げることを語られます。夢の果たす役割は大きいのです。

このように、礼拝が、捧げ物をするものだけでなく、彼らにとっては危険の伴うものでありました。命がけのものでした。世界の多くの国で、礼拝を捧げること自体が危険を伴うところがあります。北朝鮮はその代表的な国です。一人で、布団を自分の上にかぶせて祈っていると聞いています。それでも礼拝を捧げます。それだけ価値のあることだからです。危険を冒しても、犠牲を払っても、それでもこの方に自分を捧げる価値があるからです。

皆さんの中に、多くの心の障壁が礼拝に至るまであったかもしれません。なぜ、イエス・キリストに自分の心を明け渡さなければいけないのか？何も、ちょっと良い教えとして受け止めるだけではいけないのか？と思われたかもしれません。あるいは、礼拝は捧げているけれども、エルサレムの人たちのように、それが習慣になってしまって、慣れ切ってしまっていて感動がなくなっているかもしれません。心に障壁のある方はぜひ、近づいてください。捧げてみてください。信仰の旅に向かってください。そして、慣れ切ってしまっている人は、自分を教えてください。聞くだけでなく、感動してください、そして動いてみてください。